〈研究論文3〉

紫式部と中庸思想

尾田綾子

『中庸』は漢代に編集された『礼記』の中の一篇として世に伝えられてきた。異論はあるが著者は孔子の孫の子思であろう。「天命之謂性。率性之謂道。修道之謂教。」に始まる『礼記』巻十六中庸篇の文章は、全文で三五六八字の小論ながら、儒教の修己の思想を論理的・形而上学的に極めて明確に述べている。

中国において「礼」は社会の秩序「人倫」を維持するきまりであり、具体的に社会の慣習・習俗・制度として守られてきた生活の型である。中庸篇に「礼儀三百、威儀三千。」とあるように、『礼記』編纂当初各地から集められた細目は数万語に及んだと言われ、漸次整理されて前五〇年頃、昭帝の命で『小戴礼記』十九篇として纏められたのが現存の『礼記』である。その中で、中庸の思想は「君子尊徳性而道問学、致広大而尽精微、極高明而道中庸、温故而知新、敦厚以崇礼。」と礼を行う心の涵養を説き、単に伝統的形式に従うのではなく、常に「故」を学びながら「新」を会得し「今」に生きる礼を中庸の立場で自ら択びとらねばならぬとする点。「舜其大知也与。舜好問而好察邇言、隠悪而揚善、執其両端、用其中於民。其斯以為舜乎。」と人々の意見を広く問い集め、聡明な知をもって中庸に適うものを択び出そうとする点。「君子之中庸也、君子而時中。」「道之不行也、我知之矣。知者過之、愚者不及也。」と過不足なき適中を決断的に択んで生きるべきだとする点など、礼の実践の行動原理、善さに向おうとする人の心の在り方を明示している。更に、「知仁勇三者、天下之達徳也。所以行之者、一也。或生而知、或学而知之、或困而知之。及其知之、一也。或安而行之、或利而行之、或勉而行之。及其成功、一也。」と中庸を択びとる心は知情意において優れていなければならないが、それには生まれながら徳のある者も、困苦勉強の末に至

る者も、到達すれば同一であると言い、凡人に対する学問・教養の必要を説いている。

以上、中庸思想のあらましを概観したが、紫式部はどのようにして、この中庸思想を己のものにし得たのであろうか。

我が国に『礼記』が伝来した由来は審らかではないが、聖徳太子の「十七条憲法」に『礼記』の文からの引用が見られるし、皇位継承の証である三種の神器、八咫鏡・八尺瓊勾玉・天叢雲剣は中庸篇の「達徳」知仁勇の象徴であろうから、大和朝廷の中央集権国家建設に際して『礼記』の影響は大なるものであったと考えられる。一般貴族の間に広まったのはそれより下って、大宝律令により貴族の学校制度が整えられた時、唐の制度に倣って『礼記』が大学での必修教科書の一つに採択されてからのことであろう。紫式部の父の藤原為時が大学で学び、漢学者として花山帝の東宮時代に御読書始の副侍読を勤めていたり、祖父の藤原兼輔が三十六歌仙の一人とされる程の歌人でありながら『聖徳太子伝暦』などを著わしているといった家庭環境からして、紫式部も早くから『礼記』その他の漢籍に親しみ、単なる知識以上の教養を身につけ得たと思われる。源氏物語「帚木」の巻では「三史五経の道々しき方を明きらかにさとりあかさむこそ愛敬なからめ。などかは女と言はむからに世にあることの公・私につけてむげに知らず至らずしもあらむ。わざと習ひまねばねど、少し才あらむ人の耳にも目にもとまること自然に多かるべし」と男性の口を借りて、女性も漢籍の教養を持つことが望ましいと語っているが、この三史は史記・漢書・後漢書であり、五経は易経・書経・詩経・春秋・礼記であって、これらの引用文は源氏物語の随所に散見される。又、「乙女」の巻では長男夕霧の元服に備えて、父の光源氏は深謀遠慮のあげく大学寮に入学させ、「才を本としてこそ、大和魂の、世に用ひらるる方も、強う侍らめ」というわけで、専門の博士に命じて漢籍を本格的に学ばせようとしているから、『礼記』は平安貴族の教養書として常識となっていたと認められる。

しかし、当時一般の人々が『礼記』の中庸思想をどれ程深く理解し得たかは疑問である。中国において中庸篇は早くから着目されながら、特に尊重した朱熹が『礼記』から取り出し『中庸章句』を表章したのは、宋代の淳熙六年（一一八九）源氏物語に後れること二百年である。この朱熹の解説によって、爾来、中国でも我が国でも、論語・孟子・大学・中庸の四書が儒教の古典として尊重され、なかでも『中庸』の天命論・誠論は、江戸時代の朱子学者の賛同を通して、我々日本人の精神の支えとなったと考えられるのである。朱子出現前の紫式部の許にあった『中庸』は、当然後漢の碩学、鄭玄の註釈による古書『礼記』の中の中庸篇であろう。従って、注意しなければ、うっかり見過してしまうような小篇を取り上げ、「喜怒哀楽之未発、謂之中」の章句に人間の心の更に奥に働く意識の存在を認めて、心の重層性に注目したり、「発而皆中節、謂之和。」と判断・行動の規矩を見出したり、「中也

者、天下之大本也。利也者、天下之達道也。天地位焉。万物育焉。」に人間存在の拠り所になる哲学を把握した紫式部の感受性と学識に驚嘆させられる。式部の学問取得の経路を辿るべくもないが、本稿では大作『源氏物語』の中で中庸思想がどのように結晶しているかを考察したい。

一

『源氏物語』は五十四帖に分冊されて伝来されて来た。巻々の分量もいろいろで、巻々に文体の違い語彙の片寄りも見られるので、古くからあれこれ取沙汰されてきたが、源氏物語の初期の愛読者の記録として『更級日記』の「源氏の五十余巻ひつにいりながら」を勘案すれば、現存の姿こそ最初からの原型である。従って、和辻哲郎博士の原典批判、原源氏物語論以降の多種多様の成立論考、例えば、紫の上系―玉鬘系と区別して価値の上下を問うたり、恋物語として愛の賛歌・秘密の恋・愛の崩壊・愛の不毛などと主題を設けて恣意的に順序かまわず巻々を纏めてみたり、女性論として物語に登場する女性の論評に終始して一帖の独立性は考慮しないといった読み方には賛同し難い。愛読者が各自の好みに従って物語から何物かを読みとるのは自由だが、作品の構成を変えることは許されないと思う。序数詞ではない優雅な巻名を付され、昔から変らぬ順序で重ねられてきた現存の五十四巻の形態の中に、作者紫式部の意図を探求すべきである。

二

先ず、源氏物語五十四帖は、語り口の違いから三部に分けられる。一部は、一巻「桐壺」―三三巻「藤裏葉」。二部は、三四巻「若菜」―四一巻「雲隠」。三部は、四二巻「匂宮」―「夢浮橋」となる。

一部における文章表現は、登場人物の間髪入れぬ係わりをそのまま描き出す手法で、一場面に登場した人物の動きを全体的に躍動的に表わそうとするため、切れ目の無い長い文章の中で、主語抜きの用言が入り乱れ、わかりにくい悪文だとされてきたが、こうした場面を、次々と重ねて、事件の移り行きを語る文は、喩えて言えば、テレビの画面構成と同じ手法であり、更につきつめれば現場の臨場感を肌身に感じさせる効果を意図した文体である。内容は、様々の事件を連ねて、人間社会の在りようを披瀝し、特に、心と心の離合の姿を描写し、他方、王朝人の美的生活の全般を展開している。

二部は、独白（モノローグ）とも見える饒舌な会話文によって綴られる。一部での直接話法で語られた会話は、「こち来」とか「げに」とか全体に短く、場面に生き生きとした現実感を与える効果があったが、二部においては、人々が語るにしろ思うにしろ直接話法でありながら、目に見えない、心の中にある思いを、言葉に載せて、事として、はた目にわかるよう披瀝する。文庫本三頁に及ぶ一人称の

切れ目のない長い会話が次々と語られて物語は進展してゆくが、日常生活のさりげない面持ち・振舞の奥にこれ程の思いが積み重ねられ錯綜しているのかと人の心の深さに驚かされる。そして心の底の気分も文章に載せられて感得される。一部の世界では登場人物は幸・不幸いかなる場合においても瑞々しい生命感をもって、希望に満ちているのに比して、二部の内省的に語り出された言葉は、重く苦渋に満ち、苦悩に濡れている。朱雀院をはじめ源氏の君までが些細な事に悩む平凡なつまらない人格の持主に見えてくる。

三部は、はじめの「匂宮」「紅梅」「竹河」の巻で源氏なき後の末裔達の後日談が語られるが、これが又、何ともつまらない文体で、内容はとも角、表面的に事実を伝える新聞記事のように無味乾燥な調子で延々と続く。それが「橋姫」の巻に読み入った途端、誰しもはっと胸をつかれる思いを持つであろう。これが同じ日本語かと疑う程に、語り口が変るのである。懐かしいような悲しいような、情感を美しく揺さぶるような響きである。しかもこの宇治十帖の文章は、先の新聞調の文章と同じく、語り手は事件の外に居て姿を現わさない。一連の出来事として、筋の通った内容を静かに物語るのである。思出の世界が目の前に髣髴するように縷縷と語り続けているのである。大君の病死・中君の諦め、浮舟の入水、語られる内容と共に絶望感が胸裡に広がってゆくような文体である。先に新聞記事にも似た文章を読ませられているので、この不思議な文章の特殊性を意識しない者はいないであろう。

以上、文章表現を手掛りに物語を三部に分けて読むうちに、作者の意図が見えてくる。「喜怒哀楽之未発、謂之中」を読みこなしている紫式部にして初めて、人間の心の重層性を体験的に知悉し得たと考えられるが、源氏物語は一部では状況心理、二部では内省心理、三部では深層心理に光を当てて見せ、誰しもが身体に抱え込んでいる「心」の広がりと深まりの在りように気づかせたものと思われる。「達徳」は心のどこで磨かれるのであろう。

ところで作者は製作当初この物語を誰に向って語り出したのであろうか。色々な憶測が伝えられているが、『紫式部日記』の中に、道長の邸で、産後の中宮彰子の内裏還御に際して、物語の豪華本作製のことが記されている。道長が特に上等な紙やら筆墨硯まで自身で持って現われたり、式部もあらためて清書に出したり編集したりで忙しくしているとある。自室に置かれた不完全な別の草稿本まで知らぬ間に道長の手で妹君の妍子のもとに持ってゆかれてしまったことも記されている。ここで事の始めから藤原道長の命によって彰子の為に作成されたと考えてみると、物語の全体構想の理解も容易になる。摂関政治を押し進めた道長は、姫君達の女御教育に早くから心を砕いた筈である。「澪標」の巻に明石の姫君誕生の際、源氏が自ら乳母を択りすぐって都から明石へ送りこむ事件が場面として詳しく語られているが、幼児の教育は先ず環境を整えることに始まる。物語は当時女房によって姫君に

語り聞かされたが、姫君の成長する以前から、侍う女房達に読ませて、理想的な雰囲気造りをする必要があったであろう。『源氏物語』の文章は、『紫式部日記』の文章に比べて格段に格調が高い。又、『大鏡』の内容に比べると殿上人は優雅に振舞いすぎる程で善いこと美しい趣しか取り上げていない。紫式部は物語の中に理想的な王朝の小宇宙を造り上げている。『源氏物語』は中宮彰子の人間形成の為の教育書なのである。

三

「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」と君子の立場から論ずれば堅苦しいことになるが、生命を産み育てる女性の実存意識から受け止めると、生まれつきの本性を伸びやかに育て、曲がらないよう素直に生きるよう教育してゆくということになる。子供の一生にかかわる幼児期の子育てを任せられた女性ならば先ずこのように願うであろう。『源氏物語』の女主人公紫上は素直で明るい少女として登場し、源氏君に十歳で引きとられる。君は理想に適う女性に「おふしたてむ」と思い、少女もそれに応えて立派に成長する。いつまでも素直で明るい優しい心を失わない。

ただ、紫上には一つ欠点があるとされる。嫉妬心が強いということである。嫉妬心は道を修めるのに支障となるものとして多くの日本人の心底に潜んでいる根源悪なのであろうか。「十七条憲法」一四条に「群臣百寮、無有嫉妬」。と嫉妬心を誡める条があるのには考えさせられる。一巻「桐壺」も、のっけから桐壺更衣を囲繞する女御更衣の嫉妬心から語り出し、又、六条御息所の嫉妬の生霊はどこまでも源氏の君を苦しめる。

教育は普遍的なものを踏まえながら、独自の個性のより善き成長に係わるものであるから、常識・一般論の立場に立たざるを得ない。教育書としての『源氏物語』に登場する人物は皆どこか典型としての性格を担っている。

四

物語の順序からして、紫上の登場する「若紫」の巻の前の四帖を考察する。

「知仁勇三者、天下之達徳也。」知・仁・勇と心の働きをそれぞれ磨き上げることですぐれた人格者、徳ある者になる。教育の本当の目標は、素直に生を生き得る心を育てることであろう。人は学んで徳に到達しなければならない。しかし、その前に先ず知の働き・情の動き・意志の在り方に気づき認識を深めなければ磨きようもないではないか。

一巻「桐壺」は「情」について語る。人間の根源的感情は「愛」と「憎」である。物語の端緒として主人公の誕生から元服までを語り納めているが、冒頭から光源氏の母桐壺更衣を憎む宮廷の女性達の凄まじい嫉妬心の様相を語り出し、次にその原因となった、常軌を逸する程の、帝と更衣の間の深い一途の恋心を長恨歌を下

に敷きながら語る。場面は転じ、更衣亡き後傷心の祖母へさりげなく振舞う人々の洗練された思いやりの心が語られる。荒れ狂う本能的な感情の姿をたじろがずに見つめることで、「勇」が他者に向うものでなく、「知恥近乎勇」と克己の強さであることを気づかしめ、思いやり、仁の美しさを「野分だちてにはかに肌寒き夕暮のほど、ゆげいの命婦といふを遣はす」の名文で語るのである。

そして更に考察すれば、この最初の巻では「心」という語を目立つ程に多用していることに気付く。人の心・心尽くし・心苦し・心弱く・心の闇・心ばえ等々、心——と続く言葉が三十種類六十回も使われ、思う・おぼすの類は九十箇所にも及ぶ。心・心・こころと物語を聴いているうちに、幼い姫君の心にも、見たり触れたりできない「心」の存在が確かめられ、心を大切にすることを覚えることであろう。

二巻「帚木」は十七歳の源氏の君が殿上の公達四人と結婚の相手にふさわしい理想の女性について語り合う「雨夜の品定め」の場面である。ここでは本格的に心の考える働き、知的行為を取り上げている。先ず言葉の概念を正確に定義する。常識や一般論を整理する。人柄の良さについて他の文化価値の「良さ」と比較検討してみる。現実の体験談を披露し合う。以上を考察し語り合い結論を導く。この論理的思考過程は古くから「法華経」三周説法の方便品・譬喩品・化城喩品の構成を踏襲していると言われているが、換骨奪胎して若者達の談論風発愉快な笑いの中に総論・比喩論・経験論・終論と思考法をきちんと踏まえた腕前は美事である。そして結論は中庸思想の「知者過之、愚者不及也。賢者過之、不肖者不及也。」を地でゆくような的はずれの現実を面白可笑しく話した末に、「心の趣き」として、時（T）と所（P）と場合（O）を心得て相手に適わしい在り方を分別できないような者は知っていることでも表に出さぬ方が良いとされ、「君は人ひとりの御有様を心のうちに思ひ続け給ふ。こは足らず又さし過ぎたることなくものし給ひけるかな」と源氏の君は憧れの人藤壺中宮に過不足なき理想像を見出して賛美している。ここで作者は藤壺中宮を中庸の権化として描き出しているのである。「執中」は広い知識と、ものごとの両極端を踏まえて立つ緊張感・決断力を必要とするから、後の物語ではたおやかながら秘めた力強さを持つ藤壺中宮の姿が垣間見られる。そして「薄雲」の巻での、薨去後の誄では「詩曰、衣錦尚絅。悪其文之著也。」そのままのような、つつましやかで真心のこもった日頃の営みが賛えられるのである。

続く「空蟬」「夕顔」の巻では「意」の働きが反省される。恋人の選択に事寄せて語られているが、慣習に従い知的に考慮して事を選べば人生は安全だが心は空しい。それではと自然の情に任せて心の充実に酔痴れるとはかなく現実の生活には失敗する。空蟬は満たされぬまま夫の任地に去り、夕顔はあえなく急死する。さて意志決定の決め手は、知か情かどちらに重きを置くべきか、姫君自身の判断を迫るように語られているのである。

五

「執其両端、用其中於民。」中庸の思想は、現実に両端を押さえて創造的に中を実現することであるから、中の姿そのものを手本のように姫君の前に差出すことはむずかしい。「若紫」に続く「末摘花」・「紅葉賀」・「花の宴」の巻々では王朝の美意識みやびの情趣を、「葵」・「賢木」・「花散里」の巻々ではあはれの情緒を、それぞれ不足・過剰・適中の形で描き出し、中の実践知を培う教育的配慮がみられる。「みやび」に対するのは「ひなび」である。凝りすぎの源内侍と木偶の坊の末摘花の生活を事細く描いて笑わせ、理想の「中」の姿はほんの文庫本で数頁の「花の宴」で「をかし」の語をもって示している。「葵」の巻四〇頁、「賢木」の巻四〇頁を費やして、「憂し」の拒否感情と「あはれ」の感情過多の重い情感の世界を限なく語り出した後で、わずか四頁の「花散里」の巻が続く。ここでの主要語は「なつかし」である。光源氏の好まれる女性は、なつかしい人である。

本居宣長の「もののあはれ」論以来、「あはれなり」が王朝時代の最高の美意識・美的感情を表わす言葉と思われてきたが、あはれの気持はしみじみとした深い感動とは言え、常時心に抱き続けるには重すぎる。「なつかし」は中庸の「庸」の意味する万古不易の日常性である。人の心は珍らかなものを求めているようでも、その実、身に合った馴染みの深いものに魅かれている。

以上の考察から、『源氏物語』が一貫して中庸の思想によって支えられていることが明らかであろう。

（おだ・あやこ、倫理学、千葉敬愛短期大学講師）